セイキ製作所

生産現場のダイバーシティー Diversity

外国人実習生の熱意に感化

フライス加工機にワークを固定するファン・タイン・フン氏

セイキ製作所（東京都町田市、稲山正人社長）では、日本人社員とほぼ同じ待遇でベトナム人技能実習生4人が技術を磨いている。深刻な人手不足解消のため受け入れを開始した当初は、社員から反対の声もあった。しかし実習生の熱心な姿勢と簡単な工夫で雰囲気は一転した。今では社員寮で寝食を共にしながら、若手社員と実習生が互いに切磋琢磨し現場を支えている。

セイキ製作所はモーターなどのシャフトと歯車を固定し回転を伝える部品であるマシンキーのトップメーカー。高度な金属加工技術が必要だが、国内の工業高校からの採用が年々難しくなっていた。そこで、2015年に外国人技能実習制度を初めて利用。国際人材育成機構（アイム・ジャパン、東京都中央区）を介してベトナムからファン・タイン・フン氏ら2人を受け入れた。

稲山社長は「切削加工など細かな工程ではどうしても人力に頼らざるを得ない。面接では『学びたい』という熱意を重視した」と話す。しかし、当初は社内で反対の声が多かったという。現地での面接や実習生の生活指導などを担当する小松裕二取締役は「相手の言葉や文化が分からない分、抵抗感があったのでは」と振り返る。実際に受け入れてみると言葉が通じにくいことはあったが、日本語学校で学ぶような敬語表現で言い直して解決した。

一方、汎用フライス加工に必要な三角関数といった数学の習熟度は、新卒の日本人より高かった。稲山社長も「これには驚いた。教えれば教えるだけどんどん技能を吸収していった」という。

日本人社員にも変化が起きた。数カ月のうちに技能を自分のものにしていく実習生を見て、小松取締役は「いい意味で社員がライバル意識を持ち、仲間として認知するようになった」と話す。社員と実習生が互いの部屋を訪れ、料理を振る舞うこともあったという。

日本人社員にも変化芽生え

外国人技能実習生と日本人従業員が一緒に住む社員寮

現在は最初に来た2人が実習期間の延長のため、フライスの実技や座学の試験対策を重ねている。ファン氏は「ここで頑張るとベトナムでもいい仕事がある。もっと長く働いて技能を磨きたい」と意気込む。マシニングセンターの操作なども覚えるべく、在留資格「特定技能」の取得も視野に入れる。（渋谷拓海）

ポイント

稲山社長は取材後、「『帰国してもいい仕事がある』というのは、うれしいね」とほっとした様子だった。技能実習生を戦力に育て上げた。言葉も文化も違う環境で努力する姿を見てきただけに、感慨もひとしおだ。

無断転載・複写禁止